

楠本信道著 『俱舎論』における世親の縁起観

箕 浦 暁 雄

一

本書は、インド思想史上もつとも卓越した思想家のひとりであるヴァスバンドウの主著『俱舎論』に提示される縁起説を体系的に理解しようとする本格的な研究書である。非常に緻密に教義学説を纏め上げたヴァスバンドウの著書を真正面から取り上げ、その教義学説を整理しようとする研究は、大いに歓迎しなければならぬであろう。

著者は、自身の関心に基づいてまず問いを設定する。そして、これまでのアビダルマ研究の歴史を把握した上でその問題点を指摘し、『俱舎論』を読み解きながら先に指摘した諸問題を検討している。縁起とは何を意味するのか。

縁起の概念に関する様々な解釈の違いが何を背景にしているのか。ヴァスバンドウは縁起をどのように解釈するのか。著者は、まずこれらのことを問題の所在として設定する。とくに、説一切有部が、十二支縁起を有情が輪廻する過程と解釈することに注目しておいて、無我説と十二支縁起解釈や中有という概念とが説一切有部によっていかに矛盾なく説明されるかを明らかにしたいと宣言する(p. 3)。

著者の関心は、相当程度「輪廻」に向けられている。本書「まえがき」で「人間は、死後どうなるのか。自分という存在は、死をもって消滅してしまうのか。あるいは、どこかへ生まれ変わるのか。生まれ変わるとすれば、それは

何によって決定されるのか。このような問いはインド思想家たちの重大関心事であり、輪廻と業の思想は、その問いに対する一つの答えであった」(p. 7)と述べるのは、『俱舍論』の文献解読の背後にある著者自身の関心の表明でもある。

そこで「本論」でも最初にインド思想史の「輪廻説」を若干整理してから説一切有部の解釈へと論を進める。説一切有部は「生まれ変わり」という事象を勝義としてではなく世俗の領域にて容認することを、著者は強調する (pp. 88-89)。これは周知の通り『大毘婆沙論』以降の論書で明確に提示される分位縁起説を指す。輪廻が語られる際の仏教の問題関心については最後に若干触れることとし、まずは本書の構成を紹介しておきたい。

本書を紐解く読者は「まえがき」と「目次」に次いで掲載される四十ページ以上の膨大な文献表「Literature」を目にすることとなる。縁起研究のみならずひろくアビダルマ研究に関する二次資料が網羅され、有益である。本書の骨格は大きく三章からなる。「序論」では、アビダルマ文献における縁起の概念を明らかにし、ヴァスバンドゥの縁起観を明らかにするとして「問題の所在」を述べた上で、「世親の年代と著作」に関する研究史を概説する。次に「研究に用いる文献・方法・資料」について触れた後、「俱舍論」の研究史」と「縁起経釈」の研究史」、そして「縁起論争」と題して初期仏教における縁起解釈に関する種々の見解を整理している。著者は、今日までの研究を整理し終えると、「本論」では文献に基づいて、「第一章 有部の縁起観」と「第二章 縁起に関わる有部と諸部派の論争」と「第三章 世親の縁起観」について検討し、そして最後に文献解読の成果を「結論」として提示する。付随する議論や本研究の基礎資料は、「Appendix 1 十二支縁起の構成要素に関わる付随的な議論」と「Appendix 2 清弁と月称の 'pratyasamutpāda' の語義解釈」と「Appendix 3 付録資料」(「俱舍論」世間品)に引用される *Nidānasamyukta* と *Saheśaspratyakhyasamūhānāsūtra* それぞれの校訂テキストと和訳)として掲載される。なお、本書「あとがき」の後、巻末には英文概要「Abstract」と英文目次「Contents」に加え「索引」が付されている。

「序論」では、研究課題を明確にするために、多くの先行研究が祖述される。豊富な資料を参照して紹介される研究史は、アビダルマの世界に分け入ろうとする者にとつての道標となる。

本書で最初に扱われる、ヴァスバンドゥという思想家の著作をどのように思想上に位置付けるかは、繰り返し議論されてきた極めて大きな問題である。ヴァスバンドゥの著作を大きく取り扱う時には、往々にしていわゆる「経量部」問題について触れなければならなくなる。著者は見通しを立てて次のように言う。ヴァスバンドゥには思想の「変遷」が見られるが、それは「作品を著述していく段階で徐々に起こったのではなく、世親には、『俱舍論』作成時から、有部内に属するという建て前としての有部の立場、シュリーラータ、あるいは *‘Sthaviro Vasubandhu’* と同じ経量部の立場、瑜伽行派としての世親個人の立場という三つの立場があったのではないか」(p. 11) と仮定する。「全く異なる三つの立場の間で、彼自身の見解を、どのようにして、瑜伽行派の見解へと転換していくか」ということが世親の頭にはあつたはず」であつて「その転換の過程が世親の著作に表れている」(p. 11) と述べている。

『俱舍論』著述時にヴァスバンドゥが何を志向したのかについては、なお引き続き検討しなければならない。ただし、ヴァスバンドゥが執筆したと伝承されてきた多数の古典を通して、思想家の生涯のうちに起こったであろう思想遍歴を描き出すことがどれほど『俱舍論』の思想解明に有効なのか。あるいは、作者に還元される首尾一貫性が書物の上に保証されているに違いないという前提が、仏典を読み解く時にどれほど妥当なのかについては、あらためて検討する必要がある。おそらく、文献解釈は、ヴァスバンドゥの文献の意味を取り出して提示することではなく、その文献との対話によって表出することと理解しておく方がよい(三島憲一「意味への懐疑」『テキストと解釈』岩波講座 現代思想 9、岩波書店、一九九四年)。

読者は、本書に提示される研究史によつて実に多くの論点を見いだすことであろう。ここで議論を尽くすことは到底できないが、考慮すべき問題について若干言及しておきたい。

赤沼智善・宇井伯寿・和辻哲郎・木村泰賢らによる議論以降、舟橋一哉・三枝充恵・宮地廓慧らの、いわゆる縁起論争をキェルケゴールの書名をかり「死に至る病」と題して論評したのは梶山雄一博士であった（「縁起説論争―死に至る病―」『東洋学術研究』第二〇巻、一九八一年）。縁起論争について多くの研究者によつて様々に批評がなされてきたことは周知の通りである。これまで幾度となく指摘されてきたことであるが、ある研究によつて何が明らかになり何を得心することになるのかを評価することの難解さに我々は直面せざるを得ない。おそらく最も重要なことは、どれほどこれまでの研究を精密に捉えようとしても、結果として描き出されてくる研究史は著者の視点で切り取られた一断面にすぎないという、研究史を描き出す行為そのものが持つ問題点を理解しておくことであろう。研究史を描き出す行為においてもまた「学者の思想的力量」（梶山 *K. Kojima*）が問われていると言つてよい。

問題はこれだけに留まらない。今日まで繰り返し議論されてきた「仏陀の悟りの内容」（*p. 36ff.*）について言及するならば、歴史事実として釈尊が何を語つたかという問いを立てること自体に慎重でなければならぬと言えよう。すでに様々な指摘があるが、土屋博「教典になつた宗教」（北海道大学図書刊行会、二〇〇二年）の指摘は、仏教研究においても一考に値する。その指摘に耳を傾けるなら、「仏教」を明らかにしようとする時、初期経典における歴史事実の確定に開始すればよいわけではない。まして、歴史事実が正確に記されていることによつて初期の経典が経典としての位置を保証されるわけでもない。そもそも、どのような意味で「歴史」なのかが考慮されなければならないと言えよう。

著者はまた初期経典の縁起説をどのように解釈すべきかという問題（著者は「時間的解釈」と「論理的解釈」という表現を用いて整理する）に触れる。因果論に関する西洋の思想研究における膨大な蓄積（司馬春英「西洋における「因果性」

概念の諸相』『教化研究』一〇六、一九九一年。『唯識思想と現象学―思想構造の比較研究に向けて―』大正大学出版会、二〇〇三年再録）から容易に知れるが、仏教の縁起という概念を論ずる時も、「時間」か「論理」か「折衷案」かという分析ではおそらく問題解決のすつきりした見通しは立てられないであろう。もともと、当初から因果という概念一般を仏教は問題にしようとしたのではなく、「人間は苦悩する」という事実を因果関係によって捉えようとしてきた仏教の課題を常に確認しておく必要がある。大正から昭和にかけて展開した縁起研究における論証の根拠・結論は、その方法論も含め再検討されなければならないであろう。今はさしあたって下田正弘「未来に照らされる仏教―仏教学に与えられた課題―」（『思想』十一、岩波書店、二〇〇二年）の指摘に留意しておこう。以上これらの問題は著者のみに帰せられる問題ではない。評者自身、今後の課題としておきたい。

いずれにしても、今日までの研究史を整理するという作業によって、著者は、縁起研究の課題を確認する。そして、その課題を明確にすべく『俱舍論』の縁起説を詳細に読み解くことになる。

三

第一章「有部の縁起観」 アートマンという概念を定立するか否かの違いによって、仏教以外のインド哲学諸派の輪廻についての見解を「有我の輪廻」、仏教のそれを「無我の輪廻」と著者は呼ぶ。インド哲学諸派の輪廻説を概観した後、それとは対照的にいかにして「無我の輪廻」説が成立するのかという視点に立つて説一切有部のいわゆる「三世両重の因果」学説を捉えようとする。ここにおける結論は明白である。説一切有部は十二支縁起を有情が輪廻する過程と見なすが、それは無我説に抵触しない。輪廻の主体が実在すると考えるのではなく、プドガラを仮設するけれども、それは「五蘊の相続」にすぎない。これまで多くの研究で確認されてきたことであるが、著者は『俱舍論』に基づいて、このことをあらためて確認したことになる。

周知の通り、説一切有部は四つの縁起解釈を提示する。刹那 (śāntika)・遠統 (prākāśika)・連縛 (sambandhika)・分位 (vasthika) という四つである。著者は刹那と連縛という解釈を勝義、遠統と分位という解釈を世俗と見なす『大毘婆沙論』の記述から出発して、『俱舍論』や『順正理論』のなかでそれぞれ四つの縁起がどのように説明されるかを確認する。

分位縁起が説一切有部の正当説であると言っても、それはあくまで世俗の領域に包摂されるにすぎないと、著者は繰り返し言及する。『大毘婆沙論』に見られる四種の縁起解釈は、『俱舍論』や『順正理論』に踏襲されている。十分承知のことであろうが、これらの議論を読み解く鍵は、「苦の生起の因果関係」と「業の因果関係」という二つの縁起解釈の視点であろう。説一切有部が十二支縁起を有情に関わる縁起(有情教縁起)と称して、段階を表す縁起(分位縁起)こそが正当説であると説明する態度は、十二支縁起を他ならぬ「業の因果関係」と解釈するという観点を明確に提示してみせたことになるであろう。

初期經典で説かれる縁起を「苦の生起の因果関係」と「業の因果関係」という視点で捉え、十二支縁起に業の問題を論ずるといふ明確な枠組みを与える。このことによつて、人間に苦悩が生起するという事象を、諸法の生起と消滅として体系化するという教義学説の新たな地平が開かれたことになる(宮下晴輝「無明と諸行」『俱舍論』における心と形)『日本仏教学会年報』第57号、一九九二年)。つまり、説一切有部は、法という概念で人間のうちに起こるあらゆる事象を基礎付けることに成功したと理解しておいてよいであろう。よつて、勝義か世俗かと語り出すならば、業の問題を扱う分位縁起は正統説であつても当然のこと苦悩する生存世界を意味する世俗における因果関係を表明するものである。

第二章 「縁起に関わる有部と諸部派の論争」 著者はさらに『俱舍論』第三章「世間品」の議論を実に丹念に追いかけて整理する。本書の第二章「縁起に関わる有部と諸部派の論争」では、説一切有部説とそれに対抗する見解とし

て引かれる諸論師の学説そしてヴァスバンドゥ自身の見解との緊張した議論を紹介する。先の議論が後の議論の極めて重要な伏線となつている場合もあり、どの議論も極めて難解である。

本書の第二章が扱う主要な論点を整理して提示してみよう。① 無明が生起する原因をめぐる議論 (pp. 96-105)、② 縁起 (pratyasamutpada) と縁已生 (pratyasamutpanna) との意味の区分をめぐる議論 (pp. 105-110, 117-120)、③ 縁起經典を了義とみなすか未了義とみなすかという問題 (pp. 111-117, 120-123)、④ 縁起を無為とみなす解釈をめぐる議論 (pp. 123-126)、⑤ 縁起 (pratyasamutpada) という術語の定義〈語の意味 padārtha・文の意味 vākyārtha〉 (pp. 127-164) をめぐる議論。

著者が検討するこれらの議論はいずれも『俱舍論』注釈書などの記述を根拠として従来いわゆる経量部と見なされてきた論師の見解が引き合いに出される箇所である。

① 無明が生起する原因をめぐる議論 十二支の最初の支分である無明が生起する何らかの原因を設定する必要があるか否かが論点となる。この議論で引き合いに出される異説を主張する論師は、ヤシヨミトラによれば、それぞれスタヴィラ・ヴァスバンドゥとバダグンタ・シュリーラータである。著者は言及しないが、ステイラマティとブルーナヴァルダナは俱舍論の注釈書で、軌範師シュリーラータの名のみを注記する。サンガバドラもまた『順正理論』で二人の論師名を挙げず、上座の名のみを記す。この点は注意しておきたい。

スタヴィラ・ヴァスバンドゥは非理作意が取のなかに含まれているからこそ「無明は非理作意の原因とする。非理作意は無明を原因とする」と經典に説かれているのだと主張する。しかし説一切有部は非理作意が取のなかに含まれるという解釈を批判する。「取のなかに含まれる」とは、取と連合 (sāmpayoga) するからだと解釈するならば、愛や無明にも非理作意が含まれると言わなければならなくなるではないか。あるいは「取のなかに含まれる」ことによつてはじめて因果関係が知られるのだと解釈するなら、愛や無明を十二支縁起の支分として立てないことも可能とな

ろう。

一方、シュリーラータは「眼と諸色とによって無知から生ずる汚れた作意が生起する」と「無明〔に伴う〕触から生起した受によって愛が生起する」という經典の一節を引く。前者によって、根と境と識とが和合するという事態を表す触（接触）の段階で非理作意があると示されている。また、後者によって、受が生起した時点においてすでに無明が必ず生起していると言える。これに対して説一切有部によるシュリーラータ批判が詳細に説明される。

最終的に著者は、両者の態度を「經典を經典によって解説しようとする態度」と「經典よりも論書を優先させる」態度と言う（p. 110）。両者の立場は決定的に異なるものとして論書では描かれるし、實際決定的に異なるとまずは言わなければならないが、実は極めて奇妙である。両者の解釈方法に厳格な境界線を引くことはできず、実はどこまでもあいまいであることは、容易に理解できる。しかしそれでも「経量部」という名称が付されるのはなぜか。今後もし引き続き検討する必要がある。

無明の議論と同様に、ヴァスバンドゥは他の議論においても一様に経量部師と見なされる論師の解釈を引き合いに出す。引き続き、論点を簡潔に紹介しておこう。

② 縁起 (pratyasamutpada) と縁已生 (pratyasamuppanna) との意味の区分をめぐる議論 縁起と縁已生との意味の区分が議論となる。縁起と縁已生法とが共に有為法という点では両者に区別はないと規定される。ただ、經典で説かれてきたその意図に従い、縁起は原因であり縁已生法は結果であると認めておかなければならない。もともと、十支のすべての支分が原因にも結果にもなる。

この説一切有部の主張に対して、スタヴィラ・プールの「縁起であるけれども縁已生法でないものもある」という見解が引かれ、さらに経量部によるプールの批判が披露される。ヴァスバンドゥは、そのスタヴィラ・プールの説を批判する経量部師たちの見解を引用することで、論点は縁起經典を了義とみなすか未了義

とみなすかの問題へと展開することになる。

③ 縁起經典を了義とみなすか未了義とみなすかという問題 ヴアスバンドゥは、「経量部師たちは論難する」と言つて説一切有部の縁起解釈に対する批判を提示する。經典のなかで「無明とは何か。前際に対する無智である」と説かれている。これは了義であつて未了義ではない。説一切有部が主張する分位縁起説は、經典の意味と相違する。ヴァスバンドゥが引く経量部師による説一切有部批判の焦点は、經典が意図していることと大きく乖離しているという点に尽きる。そこで、『象跡喩経』を例に、そもそも經典を了義とみなすのか未了義とみなすのかが論点となる。

著者は、この議論以降「経量部としての世親の見解」が展開されることを記す(p. 111)。「俱舍論」の当該箇所やそれに対する注釈書に、ヴァスバンドゥ自身が経量部の立場に立つて説一切有部批判を述べると明記されるわけではない。もちろん、『順正理論』のこの議論のなかで、ヴァスバンドゥは上座と同一視され批判されるので、その点には留意しておく必要がある(箕浦暁雄「分位縁起の正当性に関する『順正理論』の議論」『大谷学報』第八十六巻 第二号、二〇〇七年)。

④ 縁起を無為とみなす解釈をめぐる議論

「如来が〔世に〕出現するとも出現せずとも、この法性はまさに定まつており……」という經典(因縁相應)を根拠に、「縁起は無為である」と主張する者たちがいるという言及が『俱舍論』にある。經典のなかで、縁起は *‘dhamashchitha’* や *‘dhamanyamata’* などと説明されるからには、当然無為法と捉えておかなければならないのではないかとこの発想があつた。これは『大毘婆沙論』(T. aisho27. 116b25ff) や『カタヴァットゥ』(VI. 2. 縁起論 *pañcasamuppāḍakathā*) などにも紹介される説である。

ヤシヨミトラ・プールナヴァルダナ・ステイラマティは、この説を化地部の見解と注釈する。『カタヴァットゥ』に対するブッダゴーサの注釈によると、これは東山住部と化地部との説とある(著者は本書の注513で「東山部 Pubbasalya や大衆部の説」と注記するが、大衆部を化地部と訂正しておきたい)。著者は、経量部が化地部説を批

評すると捉え、この縁起解釈に対する経量部の批評を整理して提示する。俱舍論注釈書や『順正理論』に、ヴァスバンドウの立場が経量部説のものであると注記されているわけではない。念のため再度留意しておこう。

⑤ 縁起 (pratyasamutpāda) という術語の定義 (語の意味 padārtha・文の意味 vākyārtha) をめぐる議論 「縁起」という術語の語義解釈 (語の意味 padārtha) が検討される。ヴァスバンドウは、こう説明する。“pratyasamutpāda” の “pratyā” は pravi/ の krit 接辞 LyaP 終わりの語であり、この “pratyā” は 「到達」 (prāpya) を意味する。“samutpāda” (sam+utth+pad) は、現出 (prādurbhāva) を意味する。よって、「縁起」の語は「あるものが、縁と関係して、現出すること」を意味すると言える。

これに対する文法学派の批判が示される。“pratyā” を解釈する際に krit 接辞 kiva の規定を導入するからには「到達する」という行為と「生起する」という行為との両行為に時間の前後を認めなければならないはずである。しかし、krit 接辞 krit の規定に従うなら、後の行為が発動する時点で、前の行為はすでに存在していないと言わなければならない。また、「生起する」という行為の発動によつてはじめて存在すると言えはすであるのに、「生起する」という行為以前に「到達する」という行為が存在するとは言えない。

ヴァスバンドウは、「生起する」という行為の発動時点に焦点をあてて、文法学派の批判に反論して、行為主体がないような「生起する」という行為は成立しないと主張する。

縁起の語について、ヴァスバンドウは「有部と経量部の双方の立場からそれぞれに考察」(p. 127) するのであって、説一切有部の立場で「到達する」と「生起する」ことの同時因果を認めておいて、経量部の立場では両行為の同時性を認めていない (p. 149) と著者は読み解く。引き合に出されるバダಂತ・シユリーラータの見解をヴァスバンドウが批判するのは、説一切有部の立場からなされる (p. 143) と理解されることになる。

次に、縁起の定型句「これ (X) があるときこれ (Y) がある。これ (X) が生ずるからこれ (Y) が生ずる」

(asmin satidam bhavati, asyopadad idam utpadayate) に対する解釈(文の意味 vakyārtha)が検討される。定型句の前半と後半があわせて説かれる理由が問題となる。ヴァスバンドゥは四通りの解釈を提示し、さらにスタヴィラ・ヴァスヴァルマン、先代軌範師、バダンタ・シユリーラータの見解(論師名の特定はヤシヨミトラによる)を示す。著者は次のように説明する。『縁起経釈』の記述を無批判に『俱舍論』に適用することはできないが、四通りのうち第一の解釈、すなわち、ある法が生起するのは、他の法ではなくまぎれもなくこの法によると限定するために、定型句の前半と後半が共に説かれるという解釈を、ヴァスバンドゥは支持する(p. 164, 166)。なお、評者も定型句解釈に関連して若干の指摘をしたことがある(『順正理論』における心心所の共存論証)『仏教学セミナー』七十七号、二〇〇三年)。

第三章 「世親の縁起観」 以上の通り、「有部の縁起観」を確認し「縁起に関わる有部と諸部派の論争」について分析し終えた著者は、「世親の縁起観」へと論を進める。ヴァスバンドゥが依拠する相応部「因縁相応」第16経に見られる十二支の各支分の説明と『俱舍論』における規定とを整理して提示する。

著者は無明の規定についてこのように整理する。「無明は、縁起の内容を知らないことと定義される。それに対して、有部は、世俗的解釈では以前の生存の煩惱の段階、すなわち五蘊と定義し、一方、勝義的解釈では無知(Enoia)と定義する。無明を心所として捉えている点から見れば、世親の解釈は有部の後者の解釈に類似する」(p. 189)と簡潔に述べる。ただし、伝統的にその教義概念が語られてきた脈絡を抜きにして、説一切有部とヴァスバンドゥとの異なる見解の相違のみが『俱舍論』のなかに並記されているのではないであろう。まず仏教のある課題を明らかにするために教義概念が經典で語られてきたそれぞれの脈絡がある。そしてまた教義学説の展開のなかで新たな脈絡が形成されてくる。それに伴って、概念規定の観点が変更されていることになる。生み出されてきた解釈例のみに注目するならば、ともかく表面上は見解の相違が列挙されているようにも見えるが、その概念を定義する場合の観点に注意しておく必要がある。

他の諸法とは別に定立し得る無明という法の自性を問題にしているのか、十二支縁起の段階のなかにおいていかに規定されるのかを問題にしているのか。ヴァスバンドウや注釈者たちが捉えている概念規定の枠組みを我々は明確にできればよい。

諸行以降の各支分の解釈についても、ヴァスバンドウによる解釈が列挙され、それが説一切有部の「世俗的解釈である三世両重の因果、及び勝義的解釈である利那的な縁起」と、いかなる点で異なるのかという視点で整理される。その結果は最後に「まとめ」(pp. 189-192)として非常に簡潔に提示される。ヴァスバンドウによる各支分の解釈をすべてここで紹介することはできない。本書 Appendix 3 に掲載される「因縁相応」の資料とあわせて参照して頂きたい。

四

以上、本書の内容について非常に大雑把に言及した。主としてヤシヨミトラの注釈書を参照しながら『俱舍論』の縁起説を丹念に読み解いた研究として記憶しておいて頂きたい。

最後に本書の出発点に帰っておこう。著者は、仏教の思想史を描き出す際に「輪廻があるのかないのか」という問いから出発して仏教の思想史を描いてみせる。宮下晴輝「東洋と西洋における「世俗化」概念の問題性」(『仏教とキリスト教の対話Ⅲ』法蔵館、二〇〇四年)が言及する通り、仏教が設定してきた問題関心のなかでは、輪廻とは人間の経験世界のなかにあつて止まることのない苦悩の重さを表現する概念とまずは理解しておかなければならないであろう。仏教の思想家たちは、釈尊の課題すなわち老病死の苦悩を抜きにして、単に輪廻を認めるか認めないかという問い方で議論を持ち込もうとしたわけではない。つまり「輪廻を認める」という言説は、人間のうちにある深い苦悩を認めることに他ならない。

さて、本書の解説文のなかには、評者にとって幾分理解し難い点もある。しかし本書が取り扱う文献の難解さを考
えれば、著者の丁寧な解説は、今後『俱舎論』『世間品』を読み解くための手掛かりになるであろうし、現に評者も
本書によっていくつかの知見を得ることができた。

著者が披露してくれている本格的な縁起研究に見合う十分な紹介をなし得たわけではなく、本書の重要な点に言及
できていないかもしれない。また、著者の意図を見誤っている点があるかもしれない。多くの方々にぜひともこの労
作を紐解いて頂きたい。本書を手掛かりにあらためて様々な課題を確認すると共に、新たなアビダルマ研究を切り開
かなければならないであろう。

平楽寺書店、二〇〇七年一月

B5判 1viii+329ページ

ISBN 4-8313-1093-X

追記

脱稿後、向井亮教授による本書の紹介があることを知った。参照して頂きたい（『印度哲学仏教学』第二十二号、二〇〇七年）。また本書刊行後に、アビダルマ研究の大著が出版されている。小谷信千代・本庄良文『俱舎論の原典研究 随眠品』（大蔵出版、二〇〇七年）。『俱舎論』とヤシヨームトラの注釈書『俱舎論明瞭義』の翻訳研究である。既刊の翻訳研究とあわせれば『俱舎論』全体を日本語で読むことができるようになった。また、庄垣内正弘教授は『古代ウイグル文 阿毘達磨俱舎論実義疏の研究』執筆時には扱うことがかなわなかったストックホルム民俗学博物館所蔵のウイグル語『俱舎論』写本に基づいて、漢語とウイグル語の術語を精査した。それにより当該書を大幅に改訂し、大著『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』（松香堂、二〇〇八年）を出版された。注目すべき重要な研究成果としてここに記す。